

十二世紀風刺詩の技法

——カルミナ・ブラーナのパロディーの解釈——

高 津 春 久

Florebat olim studium,

昔学芸はみごと花開きしに

nunc vertitur in tedium;

いまや人これをうとむ

iam scire diu uiguit,

知識の久しくさきはいしに

sed ludere preuauit.

いまはやるはただ賭けごとのみ

Tam pueris astucia

若者はあまりにも早く

contingit ante tempora,

狡かつを習いおぼえ

qui per malivolentiam

その陰險な心は

excludunt sapientiam.

まことの知恵を追いはらう

Set retro actis seculis

過ぎにし世

nix licuit discipulis

学徒なるものは

tandem nonagenarium

九十年の研究を終え

quiescere post studium.

休むことを許されしに

At nunc decennes pueri

いまの若者は十歳にして

decusso iugo liberi

はや学業の頸木ふりほどき

se nunc magistros iacitant,

みずからマギステルと称しては

ceci cecos precipitant. (1)

盲目めくらのくせに盲目を急かす

ヒルカ・シューマン版カルミナ・ブラーナの第六歌は激しい警世の詩句に始まる。この歌は十二世紀後半に、年老いた学僧によって作られたとされる。詩句のほとんどが独立主文であり、ずばりとした断言をつらねて遠慮なく自分の時代を裁断している。意気軒こうたる、新鮮な表現が早くから人の耳目を引いた。世の退廃をなげく歌は、まず学問研究の衰微を語ることで始まる。

第一連は〈oim〉と〈nunc〉という副詞が「花咲く」と「うとむ」、「知識」と「賭けごと」など対立する概念を二つに分け、過去に理想を、現在に墮落を見て明暗の対照を明らかにしている。学業と賭博はそのころ学生の生活を二分した関心事。努力となげやり、緊張と放恣はいつの日も学生生活に不可避のリズムであるが、時代の振子は残念ながら放恣に傾いたままである。わずか四行の対位法が時代に対する危機感と絶望を集約して、暗示

的な導入部となっている。

第二連。ここで詩人は今日の若者像に注目する。今の学生はあまりに早く、利口さ、狡さを身につける。心の容積はいたってとほしい。深い懷疑、遠い理想を持つことができぬ。せまい心で目の前の事に処する方便を早く覚える。いつもよからぬ企てにふけるから、その心を眞のサピエンティア（知恵）が訪れることはない。

情けない今の学生を紹介したのち、第三連はふたたび学芸の花らんまんと咲いた過去の時代を振りかえる。そのころ学者は孜々としてはげみ、九十年研究をつづけてようやく休息することができたという。すなわち死ぬまでよく勉強したのである。

話は昔の学芸と今の学生の間を往来する。第四連は学生の出る番。早くも十歳のとき、うるさい勉強はいやだ、これからは何をしようとおれの勝手だと宣言する。当時は小学校と大学の区分も明瞭でなく、大学は幼い年齢でも入学できた。十歳の退学は誇張ではない。早期の中退、長期の在学、ともに自由であった。たとえ十歳で退学しても、どこそこの名門大学の出だと一生鼻にかける。年をとると、自分はマグステルだと名乗り、旅先で学校の先生におさまる。何も知らぬものが何も知らぬものを教えるのである。「盲人もし盲人を手引きせば、二人とも穴に落ちん」とイエスも教えたではないか。⁽²⁾

はじめこの詩は伝統の文化や既成の学問に若者が無関心であることを嘆く。彼らが学ぶことを拒むのはなまけ心からだけではない。昔評価されたものが今は捨てられている。世間の好みが他に移ったことを知り、詩人は老いたものつねで、そこに大きい不安を感じた。若い学生が今の教育制度や学問の方法に抵抗するのは、さながら自然界の構成や動植物の生活の秩序を逆転することに当たる、とこの詩人は考えるらしい。第五連で彼は学生

から他の身分のものに目を向ける。狂っているのは学生だけではない。世はさかさま事に満ちている。

Tuplumes aues uolitant,

羽根もそろわぬひなが羽ばたき

brunelli cordas incitant,

ろばが弦かきならし

boues in aula salitant,

牛が広間で踊りを見せる

siue precones militant.

犁とる農夫は騎士のまねごと

In taberna Gregorius

酒場では誉れ失せたグレゴリウスが

iam disputat inglorius:

飲みながら議論する

seueritas Ieronimi

法廷では禁欲者ヒエロニムスが

pariem causatur obuli.

一文のせいを争う

Augustinus de segete,

アウグスティヌスはぶどう畑のこと

Benedictus de uergete

ベネディクトゥスは酒だること

sunt colloquentes clanculo

ふたり肉市場に出会えば

et ad macellum sedulo.

小声に熱あげて語らう

Mariam grauat sessio,
nec Marthe placet actio;
iam Lye uenter sterilis,
Rachel hippocrit oculis.

マリアはひざまずくを苦しみ
マルタは働くを喜ばず
レアの腹いままごもらず
ラケルの目かすむ

Gatonis iam rigiditas
conuertitur ad ganeas,
et castitas Lucretie
turpi seruit lasciuie.⁽³⁾

さてもカトーの厳格は
茶屋がよいに變りはて
ルクレチアの貞節は
いやしき放逸にふける

昔の劣等生がマガステルになりすまし、無知な学生をさらに無知にする。多くのにせ者が馬鹿を相手にくり広げるこの世の猿芝居を、いよいよ詩人は本格的に批判する気になった。学生の行動だけではない。世には狂おしいさかさまが横行しているではないか。尾羽生えそろわぬひなが飛びまわっている。ろばがリュートを爪弾く。雄牛がお城の広間に乗りこんで踊ってみせる。犁を引く牛にむかって号令しておればよい百姓が、武器を手に号令しようというのだ。どれもが奇想天外の珍事である。これらペーター・ブリューゲルの絵を見るような空想的題材は、しかしいずれも詩人の創案ではない。十二世紀の風刺作家は、自由な立場で批判するにも伝統的なトポスを用いた。リュートを弾くろばは、紀元一世紀のローマの寓話作家フェードロスに始まり、中世では広く知ら

れた詩の題材であった。ろば、雄牛、百姓は愚物の代名詞であるが、彼らは自分の能力もかえりみず、樂器演奏、宮廷舞踊、戦争などむずかしいことに挑戦する。昔からくり返される表現の型（トポス）に、今日の新しい現象を当てはめてみる。それが射たとき、人は現象の意外な実体を見て痛快を覚える。風刺詩にトポスが用いられる意味もここにあった。「さかさまの珍事」のトポスは兎に追われて逃げまどう犬、魚に追われるビーバー、鳩が驚をおそうなど、動物に例をとり、古代から中世にかけて長く好まれた。ギリシャ語でアデユナトン、ラテン語ではイムポシビレという。中世によく知られたのはウエルギリウスのアデユナトンであった。彼の詩に、恋人に捨てられたある羊飼いが絶望のあまり、自然の秩序の逆転することを願う一節がある。「これからは狼が羊を見て逃げだし、かしの樹が黄金色のりんごをつけ、ふくろうが白鳥の美声と喉をきそい、牧童ティイルスがオルペウスであってよい。⁽⁴⁾」秩序の逆転は、それを願うものの落ちつきなき心を示している。今までの生活基盤がくずれるとき、動転した魂は恐怖のあまり万事が逆転することを願う。この詩人は人びとに向かつて上から警告する姿勢をとっている。彼はそれでいて変化した世の中で、確かな視点を回復しようとして困惑する人でもある。

十二世紀は激動の時代であった。オウイデイウスやローマの風刺作家の影響が強まり、豊饒な文化が新しい自意識をもって、自分の時代を批判しはじめた。叙任権闘争、聖職者の腐敗、法王と皇帝の対立など、批判の材料にはこと欠かない。この歌の詩人が昔と今の対比に熱をあげるのも、彼が急激に変化する時代に生きたことを示している。

第六連。学生たちの勉強はなれだけが今の世の狂おしさを示すものではない。教える方もずい分墮落したも

だ。教父グレゴリウス一世は五九〇年から六〇四年まで法王であった。教会典礼を定め、グレゴリオ聖歌を制定し、ブリタニアにキリスト教を広め、大教父として一般の尊崇を集めた。その聖書の註解はスコラ学以前の中世神学の権威とされる。この聖者グレゴリウスも今では酒場に入りびたり、夜ごとろれつこの回らぬ神学論争をつづけている。中世神学の基礎となるラテン語聖書、ウルガータを作った聖者ヒエロニムスはシリアで孤独な隠者として暮らしていた。教父の中では格別の禁欲者であった彼が、いま法廷で錢一厘やるやらぬを争っている。

二人の神学の権威が戯画化されたあと、第七連は修道会の頭目、アウグスティヌスとベネディクトゥスの墮落を語る。アウグスティヌスは火著「神の国」によって名高い。彼は「聖アウグスティヌス会則」を励行するアウグスチノ修道会の賛仰を受けている。またモンテ・カシーノの修道院長、ベネディクトゥスは六世紀の中頃「聖ベネディクトゥス会則」を作った。彼の「祈れそして働け」の理想は、これをきびしく守るシトー修道会によって、ヨーロッパ中世の僧院活動の支柱となった。その会則四十章、第六項にいう「ワインは、本来僧の口にすべきものではないと本に書いてあるが、われわれが堪能するまで飲まず、その手前でやめるということで、飲むことをまず認めるとしよう。⁽⁶⁾」そもそも僧院とワインは絶ちがたい関係にある。この詩の作者も会則のことは知っていてわざと皮肉る。坊主の悪癖やみがたく、肉市場のような人の聞くところでも、つい話題は今年のワインの出来ばえのことになる。キリスト教世界を指導する権威者が、今日では些細な事柄に熱中し、本来の使命を忘れてゐる。

第八連は聖書の中の四人の女性を紹介する。ベタニアの姉妹、マルタとマリアは、イエスを家に迎えたとき違つた態度をとつた。マルタが立って忙しく接待すると、マリアは主の足もとにすわり、その言葉に聞き入つた

(ルカ伝十章三十八節)。マルタは行動的な愛の、マリアは献身的省察の象徴とされる。しかし今日のマリアにはひざまずいて人の言葉を聞く気持はない。マルタもまた接待することをやめた。ともに生まれながらの美德を失ったのである。レアはラケルの姉である(創世紀二十九章十七節)。レアには眼の病があつたが、妹のラケルは美しかった。ヤコブは妹と結婚することを望んだが、娘の父ラバンは婚礼の夜、姉のレアをヤコブに添わせた。レアはヤコブの子を四人産んだが、後でヤコブに与えられたラケルは長らく子を産まなかつた。ところで今では姉のレアが妹のように子を産めなくなり、美しかったラケルは姉の眼疾をもらい受けたと詩人はいう。マリア、マルタと同じく、この二人も自分の長所を失ひ、他方の欠点を頂戴した。今はこのように呪わしいことばかり重なる世の中である。

第九連はキリスト教世界の題材をはなれて、古代世界に例をとる。カトーは古代ローマのきびしい倫理性を追求する人物として名高い。中世の学校ではラテン語初級読本の教材としてカトー対句集(Disticha Catonis)が用いられた。この謹厳のお手本が今では女を置く料理屋にかよっている。コラティヌスの妻、ルクレチアはタルキニウス王の子に犯されたため自害した。古代以来貞潔の女性として名高い。この貞女も今は娼婦を稼業としている。

Que prior etas respuit,

過ぎし世のをげすみしもの

iam nunc clarus claruit.

今の世にときめきて名あり

iam calidum in frigidum

今や熱きは冷え

et humidum in aridum,

ぬれたるは乾く

Virtus migrat in viciam,

美德は悪徳と化し

opus transit in ocium;

勤勉はのらくらとなる

nunc cuncte res debita

今の世のよろずのもの

exorbiat a senita.

行くべき道をそれたり

Vir prudens hoc consideret,

さとき人はかねてこれを思慮し

cor mundet et exoneret,

心きよめ罪拭うべし

ne frustra dicat » Domine! »

「主よ、お慈悲を」との空しき叫び

in ultimo examine.

最後の審判の日に省かんため

quem index tunc arguerit,

神ひとたび罪ありとなさば

appellare non poterit.⁽⁹⁾

人のいかに訴えんもかいなし

詩人は今の世の多くの逸脱を語ったあと、ここにそれらが意味する所をまとめている。昔さげすまれたものが今の世に輝いている。詩人は昔の評価を本来的なもの、今日のそれは誤りだと考える。詩は伝統的な学問の習得をこぼむ学生たちを非難することで始まった。しかし彼らの学習放棄は、より大きい流れの一部にすぎない。絶

望的な逆転の諸相が世をおおっている。本来負の符号をつけられていたものがもてはやされている。時代を断罪する終節は六行になったが、全体を五十行にするための細工である。この部分はきらびやかなアデユナトンがうたい上げたものを急に冷却する最後の審判への警告に終っている。期待はずれの結びである。

ここまで積み上げられた矛盾の重荷は常識的な結語で解かれるものではない。詩にアデユナトンを用いるものは動転する心理、暗中模索の不安をもつ。いかにもこの詩の言葉は解をもとめ、問いかけながら終っている。世の人がのらくらをやめてよく働き、僧が酒を絶ち、道学先生が茶屋がよいをやめれば、万人の魂が救われ、めでたき解決がおとずれるのではない。この詩は終りの空念仏にもかかわらず、問うて答えぬ謎の表情をもっていま、この詩はただ冷笑する調べを奏でている。急激に進む時代の変化に無抵抗の傍観をきめこんだ態度である。詩人は老いている。老いるほどに、ただうち眺めて物を否定する力は異常に強まる。

老詩人をおどろかせた中世社会の変化は、十二世紀中頃から興隆する貨幣経済の力と無関係ではない。増大する金銭交易から、教会は大きい利益を受けた。ローマ法王庁と多くの僧は貪欲となり、しばしば精神世界の指導者としての品位を失った。金銭がうながす短絡した思考は、おそらくこの詩人の前半生を支配した農耕封建社会固有の、安定した倫理観を変え始めたのである。

これに先だつ一一二二年、ヨーロッパは叙任権闘争、またはグレゴリウス改革といわれるものを終えていた。これによって皇帝は司教叙任の権限を放棄し、またそれまでもっていた教会に対する精神的支配を失ったのである。この改革の影響は大きく、対立する皇帝と法王の陣営に、理論武装の必要から学問興隆の動機を与えた。

かつてない批判的精神の覚醒があった。ヨーロッパの各地に大学が栄え、改革の終了後、アラビアを通してギリシア学芸の急激な導入があった。またローマ法復興の動きがあり、皇帝、法王両派に利用された。十二世紀のラテン文学もこの対立の中に生まれたのである。それで精神的闘争を楽しむ気持がさかんであり、何ごとに対してもあふれるような創造的意欲を見せる。

詩人は学芸の花咲く昔を回顧しているが、それは詩の書かれたときからどれほどさかのぼるのであろう。この詩がヨーロッパの歴史でまれに見る学芸興隆のときに作られたことが面白い。そのころ大学生の数は急にふえはじめた。水増しされた学生は真理探求などのために来るのではない。実利的なことを考えて集まってくる。僧として出世するため、あるいは法律家になってお金をもうけるためである。酒を飲んで賭博しかしないくずれた学生も多かった。老詩人には最近の功利的な学生の行動が気に入らない。さらに学問研究の方法が今までとはいちぢるしく変わってきた。効果的な理論武装と新しい世界観の構築が、地上を二分する法王対皇帝の争いを左右する。一点集中式の研究、ひとりの権威、ひとりの教父の説を継承する学問はもうはやらない。多くの事象を明確な方向性をもって意味づけるものでなければならぬ。このような動きの中で、物語文学も次第にその性格を変えてゆく。ある主人公をめぐる事件を、冷静に時を追って記述する年代記のような形をとっていた叙事文学が、作者の造形意志をあらわに示す明快な姿をとりはじめた。

この時代を代表する哲学者のアベラールは、権威ある教父たちの学説の中から矛盾しあっている一五八の命題をえらび、その対立をいかに解くべきかを論じた。それが彼の著書「シック・エト・ノン」である。教会が文句なしとする権威者（アウクトリタース）の間にも、それほど多くの異なる見解が生まれていた。これらを比較し

てアペラールは論理的に妥当なものを定めた。それは十二世紀という時代を特徴づける著作であった。八、九世紀以来、学問研究には聖書の言葉や教父の解釈を引用することによって、自説を妥当化することが行なわれていた。それには教会が絶対化した権威をかさに着て、論敵を心理的に圧迫する効果があった。十一世紀ごろまでアウクトリタースは教会から認められたという理由で、それぞれ絶対視され、尊重されていた。

アペラールは、アウクトリタースがたがい矛盾しているのは、どれかが間違いをいつておる証拠であるとした。またどの権威にも従うことができぬときは、自分の判断に従うのがよいといった。権威に左右されぬ自主的な判断、学ぶものの思索の自由がここに強く主張されている。十二世紀の学芸の興隆は、学者が自負することのよくな思索の自由を前提としていた。この世紀は権威におかされぬ理性の決断に、はじめて大きい評価を与えたいえる。

カルミナ・ブラーナ第六歌の詩人は、古代から中世にかけて人びとの心をみちびいた聖者や教父たち、あるいは聖書の中の徳操ある人物が、その本性を失ったことをなげいている。すなわち思想と学問の世界に、彼らが普通の権威をもって通用せぬことへのなげきである。詩人のまわりが禁欲勉勵のおきてを無視する人ばかりになったというなげきではない。すべての権威が失せたあと、残された自分の理性だけをたよりに人は多くの問題に解答を与えることができるであろうか。この時代の大きい不安が、詩人の言葉に絶望的な影をそえている。

十二世紀が異端審問と弾圧の時代でもあったことを考えれば、このような恐れは当然のものと思われる。聖書に書いてあることを忠実に実行しようとして人は異端者になった。彼らは清貧に徹し、使徒の生活を実践しようとしたのである。聖職売買や聖職者の妻帯を禁じ、教会の世俗化を防ぐとした。ただ十二世紀の個人的判断の

解放は、彼らに従来のカトリック教会の教義や慣習と違った行動をとらせることとなった。幼児洗礼を自覚的信仰と無関係なものとして否定し、パンやぶどう酒がキリストの肉体や血になるはずがないから、教会の聖餐式を軽んずるなどである。この時代の愛すべき純潔の士が、異端裁判の結果つぎつぎと火刑に処せられた。その結果を前にして、人びとは思考の自由と権威の崩壊をむしろ不気味な、緊張した気持で迎えたであろう。

これらの詩句は、学問研究とそれにたずさわるものあり方について、時代をこえた警拔な助言を与えている。しかしその表現を規定しているものは純粋に中世的な状況である。むしろそれらを生み出した時代の内部へこちらの想像力を引きよせる力をもっている。

Initium Sancti evangelii secundum marcas argenti. In illo tempore dixit papa Romanis: »Cum venerit filius hominis ad sedem maiestatis nostre, primum dicite: > Amice, ad quid venisti? < At ille si persecraverit pulsans nil dans vobis, eicite eum in tenebras exteriores. » Factum est autem, ut quidam pauper clericus veniret ad Curiam domini pape, et exclamavit dicens: » Misere mini mei, saltem nos, hostiarii pape, quia manus paupertatis tetigit me. Ego vero egenus et pauper sum; ideo peto, ut subueniatis calamitati et miserie mee. » Illi autem audientes indignati sunt valde et dixerunt: » Amice, paupertas tua tecum sit in perditione. Vade retro, sathanas, quia non sapiis ea, que sapiunt nummi. Amen, amen, dico tibi: non intrabis in gaudium domini tui, donec dederis novissimum quadrantem. » Pauper vero abiit et vendidit pallium et tunicam et uniuersa que habuit et dedit cardinalibus et hostiariis et camerariis. At illi dixerunt: » Et hoc

quid est inter tantos? » Et eiecerunt eum ante fores; et egressus foras fleuit amare et non habens consolationem. Postea venit ad Curiam quidam clericus diues incrassatus, inpinguatus, dilartatus, qui propter seditionem fecerat homicidium. Hic primo dedit hostiario, secundo camerario, tercio cardinalibus. At illi arbitrati sunt inter eos, quod essent plus accepturi. Audiens autem dominus papa cardinales et ministros plurima dona a clerico accepisse, infirmatus est usque ad mortem. Dives uero misit sibi electuarium aureum et argenteum, et statim sanatus est. Tunc dominus papa ad se uocauit cardinales et ministros et dixit eis: » Fratres, uidete, ne aliquis uos seducat inanibus uerbis. Exemplum enim do uobis, ut quemadmodum ego capio, ita et uos capiatis. » (7)

マルコ(マルク)の銀貨による聖なる福音のはじめ。そのとき法王はローマの臣下にいわれた。「人の子がわれらの栄光の座位に近よるとき、まずいえ『友よ、何のために来たのか』と。そこで彼がおまえたちに何ひとつ与えることもなく、いつまでも戸をたたきつつけるなら、彼を外の暗やみに追いたすがよい。」あるとき貧しい学僧が法王さまのお役所にやってきて大声でいったことがある。「法王さまの門番でおられるあなた方はせめて私をあわれんで下さいませ。貧亡の手が私をとらえました。まことに私は貧しく困っております。どうか私を災難と苦しみから救うて下さいませ。」彼らはこれをきくと大へん不きげんになっていった。「友よ、身の破滅するまでおまえの貧困と離れずにおりたまえ。サタンよ、引きさがれ。おまえは貨幣の思うことを思っていないから。まことにわれ汝に告ぐ。最後の「コドラントを払いおわるまで汝の主の喜びにあずからず。」そこで貧しい男は出てゆき、外とう、上衣、その他の持ちものをみな売りはらい、枢機

卿、門番、侍従に金を与えた。彼らはいった。「こんなに大ぜいの人では、これっぽちが何になりましよう。」そして彼を押しほり出した。彼は外に出て激しく泣いたが、なぐさめるものはいなかった。そののち法王庁にひとりの金持の僧がやってきた。肥えふとりずんぐりしていた。いつか暴動を起こし、人殺しもやった男である。彼はまず門番に、次に侍従に、さらに枢機卿に金を与えた。すると彼らはもっと多くもらえると考へた。だが枢機卿や役人どもが学僧から多くの贈物をもらったことが法王さまの耳に入ると、死ぬほど重い病氣になられた。金持は法王に金銀の葉を送った。すると立ちどころに元氣におなりだった。そこで法王さまは枢機卿や役人を呼びあつめ、みなの方に申される。「兄弟たちよ、だれにも不誠実な言葉でだまされることのないように氣をつけなさい。私が受けとるとおり、あなた方も受けとるように、私はここにお手本を示すのだ。」

ローマ風刺詩(Rom satire)という歌のジャンルがある。ローマ法王庁の貪欲を非難する詩である。この作は同種のものの中でもっとも短く、辛辣味はかえってもっとも鋭い。他にこの名作を引きのばしたものがある。だがエビゴネンの機智はにぶく劣る。この歌は十二世紀後半に作られた。聖職叙任権闘争後、教会を相手とする多くの歌が問題としたところ、聖職売買と僧侶の金錢欲、法王庁の腐敗を風刺する。風刺の基本的な手法は語呂合せである。この種の歌では使徒マルコとマルカ(マルク)、アーラ(祭壇)とアルカ(錢箱)、ヌーメン(神意)とヌムス(貨幣)を通わせる。この詩人はマルコとマルカを引掛ける単語の遊びで詩を始めているが、そのあとは聖書の言葉を文章単位で変形する。そのとき原文の最小部分を変えただけで、風刺のスケールは拡大し、非難

の矢は目標の急所を射る。語呂合せはその場かぎりの笑いを呼ぶだけであるが、激しい風刺は文章の効果的なロディーによってこそ得られる。詩人の才気はあふれるばかりである。福音書の引用句をつづり合わせ、法王とその枢機卿が金をむさぼる様子を彼らの言葉と仕草で描きだす。風刺詩人としての彼の能力は絶大であって、いかなる描写でも聖書の有名章句を用いて作りだすことができる。全篇、すなわち風刺的聖書パッチワークの大傑作と呼ぶことができよう。

詩句の形をとらぬこのラテン文は、当時のミサにおいて、説教前に行なわれた「福音章句の朗読」の形をとっている。まず朗読は当日の章句の表題から始めるのを習いとする。その表題がここに茶化されて「マルコの銀貨による聖なる福音のはじめ」とある。マルコはマルクに通ずるからいわれており、実際の引用はマタイ伝からが多い。表題のあとミサの福音朗読はきままって *« In illo tempore : »* 「そのとき」という言葉で始まる。風刺テキストはそれまでも一致させる念の入れ方。ミサの朗読章句は通常先頭と末尾に教訓的な言葉を、中ほどに教訓を例示する物語二つをおさめるものである。この構成を風刺作品は自分のものとする。坊主の口調を使って坊主をあばくためである。最初に法王が臣下に語る言葉「人が来たら、金をもってきたかをまず聞け」が第一の教訓であり、末尾の教訓とは「まわりの臣下も自分の例にならうがよい。自分が金を受けとったように、おまえたちも受けとれ」という法王の言葉である。これらを肉づける二つの物語とは貧しい学僧と富める学僧の話である。貧しい学僧があらわれ、門番に哀れみを請うまでの風刺テキストを左に、対応する福音書本文を右にかかげる。

Cum uenerit filius hominis ad sedem
maiestatis nostre

Mt 25, 31

cum autem uenerit Filius hominis in maiestate sua... tunc
sedebit super sedem maiestatis suae

Mt 26, 50

Primum dicite: > Amice, ad quid ueni-
stis? <

dirixit illi (Iudae) Iesus: Amice, ad quid uenisti?

Luc 11, 8

et si ille perseverauerit pulsans;

Mt 25, 30

inutilem seruum eicite in tenebras exteriores

Luc 1, 8

Factum est autem,

Mt, 15, 22

mulier Chanaanaea... clamavit dicens ei:

Job 19, 21

misericordiam mei saltem uos, amici mei, quia manus

Domini tetigit me

Misericordiam mei, saltem uos, hostiarii
pape, quia manus paupertatis tetigit me

ここに引用するマタイ伝やルカ伝の章句は、すべての中世人がミサや典礼に参加して、よく記憶する所であった。それをパロディーすることによって、風刺作家はその批判的な主張をこの上なく印象ぶかい形にすることができた。中世の詩人は自分の考えを伝えるためには、現代に期待できない便利なノートを一冊もっている。その

中に彼の言葉を書きつけると、たちまちふしぎな和音や不響和音が生まれでる。マタイ伝が再臨するイエスのことを「人の子」といい、彼が天使を具して栄光の座位につく日のことを語るとき、法王が法王庁をたずねる俗世のひとりを「人の子」と呼べば、ここに耳をおおいたくなる言葉の低下を感じる。さらにマタイ伝の「栄光の座位」を法王が法王庁の代名詞とすれば、身のほど知らぬその自負心はすでに漫画の題材であらう。

法王は「貧乏人がいつまでも戸をたたきつづけるなら、外の暗やみに追いますがよい」と指示している。「いつまでも戸をたたきつづけるなら」が由来するルカ伝十一章八節は急な客の来訪にパン三つを貸してくれと友人の戸をたたく人のことを語っている。これにつづいて名高い約束の言葉がある「求めよ、さらば与えられん。たずねよ、さらば見いださん。門をたたけ、さらば開かれん。」ここでルカ伝の「戸をたたきつづける」という言葉を用いたのはこれにつづく「門をたたけ、さらば開かれん。」を聞き手に想起させるためであった。しかし救済への期待は「彼を外の暗やみに追いますがよい」によって断たれる。期待のあとに意外な裏切りを接続し、ペトロの後継者たる今日の法王の無慈悲を示そうというのである。「暗やみに追います」という表現をとるマタイ伝二十五章三十節は、それに先だつ「すべて有てる人は、与えられていよいよ豊かならん。されど有たぬ者は、その有てる物をも取るべし」からの続きである。これはやがて登場する貧しい学僧と富める学僧の立場を要約する言葉にもなっている。神を愛し隣人を愛すべきことをキリストは説いた。法王庁には金持だけを入れよ、という指示は法外である。この風刺文の面白さは、教訓を与える立場にいる法王が、日ごろ教訓に用いる聖書の言葉で冷笑されることにある。法王の教えに従う門番が貧者を扱ふ態度もじつに冷酷である。

Mc 8, 33

vade retro, sathanas, quia non sapis ea, vade retro me, satana, quoniam non sapis quae Dei sunt,
que sapiunt nummi. sed quae sunt hominum.

マルコ伝に見えるペテロに対するイエスの言葉「サタンよ、わが後に退け、汝は神のことを思わず、反って人のことを思う」に逆行し、「金の何たるか知らぬものは、およそ法王庁に入ることができぬ」という。パロディーはただ一語《deus》を《nummus》(貨幣)とするだけ。皮肉にも《nummus》は《numen》(神意)に通ずる。貧しい僧の懇願は、すべての苦悩をわが過ちに対する神の処罰と考えたヨブの言葉による。だが僧の真率な言葉にどこまでも無情な門番は、使徒行伝八章二十節のペテロの言葉から《pecunia》(金)を《paupertas》(貧しさ)に変えて返事としている。

Act 8, 20

paupertas tua tecum sit in perditione Pecunia tua tecum sit in perditionem

聖書のこの一節は聖職売買という語の発端をなすものとして名高い。ペテロとヨハネがサマリヤ人の頭上に手をおくと聖霊が下る。魔法を使うシモンという男は、これを見てその力を金で買おうといった。神の与える力を金で買えると考えるなら、おまえの金なんか減びてしまえ、とペテロはいう。以来聖職売買のことをシモニアという。門番をふくむ法王庁全体がシモンの行動に走っている。この章句はそれを衝く。門番はさらにいう。

Mat 5, 26

Amen, amen, dico tibi: non intrabis
in gaudium domini tui, donec dederis
novissimum quadrantem.
Amen dico tibi, non exis inde, donec reddas
novissimum quadrantem.

これは山上垂訓のキリストの言葉「一コドラントも残りなく償わずば、獄をいずること能わじ」を變形している。「獄から出る」を「入りて主の喜びにあずかる」と反意語に変えている。ただし「主の喜び」は神の国を意味せず、この場合法王庁に入ることの許しを得る意味である。ふたたび言葉を低下させて効果的である。僧はいわれた通り、最後の「コドラントまで支払って入れられることを望んだ。まさに「天国はよき真珠を求むる商人のごとし。価たかき真珠一つを見いださば、往きて有てる物をことごとく売りて、これを買うなり」というマタイ伝の章句にしたがって行動した。だがこゝは天国の門ではない。門番たちは貧者のさし出す金額のわずかであることをかえって冷笑する。

Io 6, 9

Et hoc quid est inter tantos?
Sed haec quid sunt inter tantos?

ヨハネ伝六章九節は、大麦のパン五つと魚二匹をもつ子供を見つけたイエスの弟子が、五千人の群衆にこれに分ければ、ひとりにもれほどの分け前があるうかとあやしむ所である。イエスはこれを分け与え、すべての人を満足させることができた。だが貧しい学僧の古着の代金をうばい合う法王庁の門番は各自の分け前のとほしさを

なげくだけである。

新たな人物が登場する。金持ちで、でっぶり太った学僧である。彼を語る言葉はマルコ伝十五章七節にバラバという男のことをいうのと一致している。バラバは暴動を起こし人殺しをして獄につながれていた。過ぎ越しの祭のたびにピラトは囚人ひとりを選びゆるすことにしていたが、彼はバラバを選び、イエスを十字架にかけた。

Mc 15, 7

qui propter seditionem fecerat homicidium.
Qui in seditione fecerat homicidium.

マルコ伝に一致した辞句は、悪事を重ねつつ処罰をまぬがれ、金をたくわえてきた男を想像させずにはおかぬ。先の学僧は自分の貧しさを神の処罰と考える誠実な人であったが、でぶの学僧はバラバによって悪の典型となっている。身につける衣類を売ってまで入れられることを求める誠実の人を門番はこぼみ、悪人であっても金をもつ人なら迎えようとする。

門番や枢機卿が金持の学僧から多額の金を得たことを法王は聞いた。彼はショックで死ぬほどの病氣である。そこで学僧は法王にも利き目のたしかな薬を送った。金貨、銀貨の薬である。これを飲めばたちどころに病は平癒。

To 5, 9

et statim sanatus est.
Et statim sanus factus est homo ille.

ヨハネ伝はいう。三十八年も寝たきりの病人にむかって、起きなさい、マットをたたみ上げ歩きなさいとイエスがいう。その男はたちまち癒えていた。そしてマットをたたんで歩きだした。キリストの奇跡が病人をいやしたように、法王の病には金がすぐ効く。章句の一致によって、人はキリストの奇跡を思い、ローマにおこる現世の奇跡をあざ笑う。法王は元気をとりもどし、臣下を集めて説きはじめる。

Eph 5, 6

Fratres, uidete, ne aliquis uos seducat
inanibus uerbis.

パウロの後継者である法王の言葉がエペソ人に宛てたパウロ自身の手紙の言葉と比べられる。「汝ら人の虚しき言にあざむかるな」とパウロはいった。その先にある言葉「けがれたもの、貪欲なものはキリストの国、神の国に入ることができない。貪欲なものは神よりも地上の美味を愛するからである」との関連で、「虚しき言」はいわれている。すなわち貪欲なものがその思いをとげるため口にする言葉である。法王が「おまえたちは不実の言葉で人にだまされてはならぬ」と臣下にさすととき、「手に何物も持たず願いごとをしに来るものを法王庁に入れてはならぬ」を意味する。エペソ人にパウロが警告した貪欲者の「虚しき言」が、じつは法王の口からもれている。

Io 13, 15

Exemplum cuius do uobis, ut quemadmo-
dum ego capio, ita et vos capiatis. Exemplum enim dedi uobis, ut quemadmodum
ego feci uobis, ita et vos faciatis.

この法王の言葉が福音パロディー全体の結びとしておかれている。ヨハネ伝のイエスの言葉からただ *«facio»* を *«cano»* にするだけ。字句の変更は最小であり、パロディーの効果は大きい。イエスは弟子たちの教師として彼らの足を洗ってやった。あなたがたも足をたがいに洗うべきである。わたしがあなたがたにした通りあなたがたもするよう、わたしは手本を示したのだ、という。イエスは他へのいたわりを教える。法王は他からむさぼる方法を教える。

十二世紀の聴衆の心にこの風刺的パロディーの語句が与えたであろう複雑な味わい、辛らつで痛快な味わいここに典拠との比較によってよみがえらそうとした。作者のねらいのほとんどを捉えたと思っている。

法王周辺の現世的欲望を、キリスト教世界の汚れとする声は十一世紀に起こった。一〇九九年に作られた『トレド大司教物語』⁽⁸⁾ は法王ウルバーン二世の宮廷の美食とわいろを写実的に描きだす。トレド大司教は法王遣外使節の地位を法王に願うため、特別の贈物をたずさえローマをたずねた。ウルバーン二世は目ごろ二人の殉教者、アルピヌスとルフィヌスの聖遺骨の靈験を信じ、その探索を臣下に命じていた。法王庁の門番はアルピヌスの聖遺物をとどけるといえば、大司教を快く通した。法王は酒宴の最中であつた。四人の太った枢機卿が、紫衣をまとい、大理石の玉座にある法王の左右から、重い純金の杯に美酒をついでいた。法王は一杯ごとを人びとの魂の救済のため、世の病人平癒のため、豊作のため、平和のため、旅人と航海者の無事のため、ローマ教会の平安のためを祈りながら飲んでいた。もうこれ以上は朕の胃袋がもたぬといわれても、法王の祈願をさらに枢機卿らがせがむ。法王が飲めなくなると、最後の杯を枢機卿が干した。

このときトレド大僧正があらわれ、聖遺骨を献ずるので法王は狂喜する。彼はとくに法王の右側にすわるよう

に命ぜられ、つがれた四杯の酒を即座に干した。そして希望どおりアキタニア遣外使節の地位を約束されるのである。この物語はすでに風刺的色彩をもっている。しかしこれによって法王庁内部の放縱と、各地の大司教のローマ訪問の目的の何たるかを知ることができる。

一一九八年、インノセント三世が法王の位につく。風紀にやかましく、政治手腕にたけた彼は、法王権をいちぢるしく強大にした。彼は法王庁に入ると、門番と下級役人の数を思い切り少くした。学僧も俗人も以前とちがって願ひ出れば法王に拜えつがかなうこととなった。この改革は十二世紀末に法王庁下級役人が、広くわいろを受けとる習慣をもっていたことを示す。わいろを使うものだけにだけ門番は戸を開いた。

風刺詩『マルコの銀貨による聖なる福音』に登場する二人の学僧は、何のために法王庁に入ることを求めたのか。そのころキリスト教世界の各地から、多数の僧や学僧がローマの法王庁をたずねた。ここに押しよせたのは、僧祿を支給される有利な教会役職におさまろうとするものである。法王、枢機卿に謁見を許され、さらに愛顧を受けることをもとめて取次役に金を贈った。謁見料いくらという相場も立つ。高い金でにせの法王勅書をつかまされることもある。その他教会財産、聖職の売買は教会法がきびしく禁ずるところであったが、裏金を献納して許されることもある。こういう用件で法王庁をたずねるのもかなりいたのである。インノセント三世は法王になると、書記、筆耕以外の役人に外部から報償をもとめることを禁じ、勅書発行に規定料金をさだめ、にせ勅書を作った工房には嚴罰を与えた。だが法王はこれらの改革によってつねに十分の成果をおさめたのではない。金のあるものが法王、枢機卿に拜謁を許され、また僧祿を与えられることに立腹する詩は、十三世紀になっても多く作られていた。

Licet eger cum egrotis
et ignotus cum ignotis,
fungar tamen uice cotis,
ius usurpans sacerdotis.

flete, Syon filie!
presides ecclesie
imitantur hodie

Christum a remotis.

Si priuata degens uita
uel sacerdos uel leuita
sibi dari uult petita,
hac incedit uia trita:
preuia fit pactio
Symonis officio,
cui succedit datio,
et sic fit Iezita.

自分は病めるもののひとり
名もなきもののひとりではあるが
このたび砥石の役目をつとめ
司教のなざる訓戒をあたえたい
シオンの娘たちよ、泣くがよい
今日教会を守るものは
キリストにならおうとして
かえってその教えの敵となっている

僧祿をもたぬ
司祭か助祭が
望みのものをせしめるには
人も知るこの道を行く
シモンの流儀で
あらかじめの契約を
つぎに金をわたすと
聖職売買成立

Iacet ordo clericalis

in respectu laicalis,

sponsa Christi fit mercalis,

generosa generalis.

uneunt altaria,

venit eucharistia,

cum sit nugatoria

gratia venialis.

Donnum Dei non donatur,

nisi gratis conferatur;

quod qui vendit uel mercatur,

lepra Syri ulneratur.

quem sic ambit ambitus,

ydolorum seruitus,

templo sancti Spiritus

non compaginatur.

かくて俗人の目にも

僧の地位は低い

キリストの花嫁(教会)も金で買える

名門の女性が娼婦になる

祭壇は売りに出る

ミサも金で買える

金で買った神のお慈悲は

何の力も持たぬはずだが

神の贈物はただでもらわぬと

いただいたことにはならぬ

それを売買するものは

かのシリア人のレブラにより傷つこう

欲心にとらわれた人は

偶像を礼拝するもの

聖霊のやすめる

御堂の石ずえとはなりかねる

Si quis tenet hunc tenorem,
frustra dicit se pastorem,
nec se regit ut rectorem
rerum mersus in ardorem.

hec est enim alia
sanguisuge filia,
quam uenalis curia
duxit in uxorem.

In diebus iuuentutis
timent annum senectutis,
ne fortuna destituitis
desit eis splendor cutis,
et dum querunt medium,
uergant in contrarium;
fallit enim vicium
spetiem uirtutis.

このような生き方をするものが
自分を神の羊飼いと呼ぶのは間違いだ
物欲にとりつかれて

われひとりさえ指導者らしく導けない

金で買える法王庁が

妻にした姪の

ふたりの娘の一方が

この欲望に外ならぬ

彼らはまだ若いときから

老後の年月をおそれている

やがて幸運が去り

皮膚のつやも失せるのかと

それで中庸の徳をもとめても

とかく極端に落ち入る

悪徳は人の目をあざむき

これもまた美德と思えるので

Vt iam loquar inamenum:

sanctum crisma datur unum,

iuuenantur corda senum

nec referant motus renum.

senes et decrepiti

quasi modo geniti

nectaris illiciti

hauriunt venenum.

Ergo nemo uiuit purus,

castitatis perit murus,

commendatur epycurus

nec spectatur moriturus.

grata suntconiuiua;

auro uel pecunia

cuncta facit peruia

pontifex futurus. 9)

十二世紀風刺詩の技法

ここで面白くないことをひとつ話そう

聖なる香油が金で売られている

老人の胸は若いさわぎを覚え

腰のうずきを抑えきれない

力失せた老いばれめが

生まれたての赤子のように

禁じられたネクタルの

一服を飲んで

清らかに生きるものはおらぬ

純潔の壁くずれおち

エピクルスがほめられる

彼とてもいつか死ぬ日が、など考えぬ

宴会つづきは楽しいもの

これから司教になりたいものは

金と貨幣の力ずく

どの道行くも通行自由

終りに風刺詩人として名高いフランス人のヴァルター・フォン・シャティヨン (Walter von Chatillon, Gualterus de Castellione) が一一七〇年ごろ作った詩にうつる。この歌も教会と法王の腐敗をとり上げていて、同じ問題に先の散文とはちがった表現を与えている。彼は一一三五年ごろリルに生まれ一一八九年以後アミアンに死んでいる。パリとランスの大学に学び、英国王ヘンリー二世の官房に出仕した。のちにシャティヨンの聖堂付属神学校の校長として名声あり、地名が詩人の名となった。その後もボローニヤとローマの大学で法学を学び、フランスに帰ってはアミアンの司教座教会参事会員であった。アレクサンドロス大王をたたえる叙事詩を残しているが、叙情詩も五十一篇と多作であった。そのうち、二十二篇が風刺詩である。

彼の叙情詩は熟達したラテン語を用いてオウイディウス風であり、頭韻を用いて遊戯的な力量さえうかがわせる。ラテン詩人としての創造力は先の二作をしのいでいる。十二世紀の詩人としては、聖書やアンティーケから故事を引くことが少いだけに、かえって個性的な表情をもつ悲嘆と慨世の詩句を作りあげている。風刺詩でありながら言葉の輪郭が乾いておらず、十分に叙情的な詩句によって教会批判を歌い上げた。前おきの第一節のあと、第二節から四節までの主題は、固定収入のある教会役職をわいろを用いて手に入れること。第五節から七節前半は、地位を得たあともおとろえぬ僧の物欲を、さらに七節後半から八節半ばまでは、生活の楽しみ、とりわけ肉欲のことを語る。八節の終わりはふたたび諸悪の根源である聖職売買のことにかえる。

本来教会の誤りを正すのは司教の仕事であるが、この歌の中でそれを行なおうとする詩人は、名もなき病人にすぎぬ自分ごときが、と僭越の行為をわびている。公衆を前に教会批判を始める詩人の立場が、鮮明に浮かび出る冒頭の句である。頭ずが高い、といわれる前に予防線を張っている。

十二世紀に行なわれていた聖職売買の手順が第二節から読みとれる。買手は僧祿、つまり聖職収入にめぐり合えぬ司祭や助祭たちである。彼らが収入のある教会役職にありつく方法とは昔からよく知られている。詩人の言葉づかいからも、責めるべきは困っている司祭、助祭ではなく、教会内の役職を売って私服を肥やす司教たちである。それは第一節で「教会を守るもの」(presides ecclesiae)と呼ばれる人びと。五行目はことに手続きの細部が分かるので面白い。売手である司教の口約束がもとで、今までいくども不履行があつたらしい。買いたい司祭と売手の間に正式の契約書まで交わされている。約束通りの支払いがあると役職が与えられる。

こうするうちに、俗人は聖職者を尊敬の目で見なくなった。金で買われた司祭職が行なうサクラメントは神の前で有効か無効かという問題が、十一世紀末から十二世紀にかけて大きい議論を引きおこした。ヴァルター・フォン・シャティオンは第三節で無効を強く宣言している。

第四節の「神の贈物」とは洗礼、堅振、聖体、告解、終油、叙階、婚姻の秘蹟をいう。これらはキリストの定めた恩寵を与える力をもつ。だがシモニアによる司祭職はこれらの恩寵を無意味にする。シリアの將軍ナーマンはらい病を患ったが、予言者エリシヤによっていやされた。エリシヤの下男ゲハジは治療の代価をナーマンから要求し着服した。神の与えた靈力を売ったゲハジはシモニアを実行したのである。彼は罰せられ、ナーマンのらい病をゆずり受けた。⁽⁴⁰⁾ また四節終りの二行はコリント人への第一の手紙六章十九節「汝らの身はその内にある、神より受けたる聖靈の宮にして、汝らは己のものにあらざるを知らぬか。」にもとづく。

第五節にあらわれる蛭は箴言三十章十五節によれば二人の娘をもっており、それぞれが「よこせ」「よこせ」という。二人の娘の名はぜいたく(Luxuria)と強欲(avaritia)である。また蛭とは貨幣(peccunia)のことであ

る。

第六章はやはり物欲にとりつかれた僧の生涯を語る言葉と見る。若い時から老年にやってくる貧亡が恐ろしい。中庸の徳とはここでは儉約をいう。年とって貧しいのはいやだから儉約して蓄える。だが若い時に金がたまるとぜいたくを覚える。儉約の美德とぜいたくの悪徳は背中合わせになっている。

第七節は僧が職を得て金もうけができて肉欲をみたす話。バルサムの入ったオリブ油、クリスマは三つの秘蹟、洗礼、堅振、叙階に用いられる。とりわけ司教への叙階に用いる油が高く売れる。いまや残念ながら聖職は売物である。聖職売買の話が三行目から急展開して老人性欲の話になる。じつにたまげた歌である。

第八節は悪者万歳の乱調子で結ばれる。この詩人の教会批判はつねに悲しみにあふれ、その詩句は深いため息とともにあった。法王とその役人を漫画にした先の散文が、軽快な批判であったのと比べて、作品の重みと気品が違っている。しかし最後の二節では虚構の快樂贊美があまりにも高くひびきわたる。捨てばちの中にあつて、純潔の塔のくずれ去るのを見る詩人はまことに気の毒という外ない。

ここにとり上げたカルミナ・ブラーナの三篇に共通するのは、それらが嘆いている事態から時代が回復できることを絶望している点である。ことに最初の詩は、教会の因習とめざめる理性の間に苦しい模索を強いられるこの世紀の声を、感動的な形で伝えている。ここでは病める時代を見ずえる目が狂おしい世の混乱を教え上げていた。それらを絶望的な問いに高め、答えられぬまま詩を絶ち切っているのである。二つ目の福音パロディーはローマ法王庁の内部を小説的な関心で、したがって写実的映像によってえがき出す。散文作家の心は教会の腐敗に向かつて冷笑的である。徹底した聖書章句のパロディーは、彼にとってまず修辞上の課題であった。ここには

漫画によって断罪されたものの痛ましい印象だけが残る。そして修復への期待は完全に断たれたままである。

ヴァルター・フォン・シャティヨンの八つの詩節は、シモニアの汚濁に侵された教会の空洞化を純粹な憂いとともに訴える。二つ目の散文がパロディーの鋭利な刃であればいたものを、三つ目の詩が憂悶の調べによって内面化している。だが深い信仰から出たフォン・シャティヨンの警告の歌も、終りの詩節は快楽に酔いしれた世の動きをただ啞然と見守るばかりに見える。

法王グレゴリウス七世の改革は、シモニアと僧の妻帯を禁じ、キリスト教界の根ぶかい陋習を断つかと思われた。しかし十二世紀後半に作られたこれらの詩が示すように、彼の改革は十分に機能せず、腐敗はなお引きつづいて存在した。シモニア的司教はその地位を高い値で買いつつたのであるから、職務上信徒に分かち与えるべき秘蹟を高く売ることによって出費を回収しようとした。このような司教の下にいる教区司祭も洗礼や埋葬のために金や品物を要求した。神の与える恩寵であるサクラメントが、こうして高い謝礼と引きかえに信徒に与えられることとなった。

また十世紀以来聖職者の妻帯、蓄妾がきびしい禁止にもかかわらず横行していた。グレゴリウス改革前は、俗人が当人の宗教的素質と無関係に、世俗的な目的のために聖職者を任命する。そのため聖職者もまた俗人のように生活し、彼らに求められる徳目を放棄していたのである。フォン・シャティヨンの歌は、金銭で買える司教叙階と司教の性欲話を強引に一つの詩節にまとめている。聖職腐敗は様々な形に現れるが、それらは一つの病める体質から来ている。十二世紀人の詩節構成として、当時はこれが奇妙なものでなかった。

腐敗とそして混乱の中から上がるこれらの歌声は、「快活な絶望」とも名づけられるふしぎな調べをもってい

る。むずかしい状況を改めるには力足りぬことをそれは知っている。しかし自立しはじめた理知の力に鞭をふるいながら、何かを期待している。それは十三世紀に消えて行くが、まぎれもなく十二世紀からは聞こえてくる、人間の強さを感じさせる声である。

注

カルシナ・インローナの詩のチキストは最も新しい校訂の成果を尊重して

Carmina Burana, Texte und Übersetzungen von Peter und Dorothee Diemer. Herausgegeben von Benedikt Konrad Vollmann. Frankfurt am Main 1987.

による。チキストの位置はこの書の作品番号と行数によって示す。この作品番号は一般に用いられているヒルカ・シューマン版のそれと共通である。

- (1) CB 6, 1-16.
- (2) Marth. 15, 14.
- (3) CB 6, 17-36.
- (4) *Eclogae VIII* 53 ff.
- (5) *Licet legamus vinum omnino monachorum non esse...*, *saltem vel hoc consentianus, ut non usque ad satietatem bibarnus, sed parcius.*
- (6) CB 6, 37-50.
- (7) CB 44.
- (8) Paul Lehmann, *Die Parodie im Mittelalter*, 2. Aufl. Stuttgart 1963, S. 26 ff.
- (9) CB 8.
- (10) II. Könige 5, 20-27.